

隋唐長安近郊の墓葬に系統的な分析を加えた最初期の代表的な研究といえよう。現在も、上記の研究成果は色あせてはいない。

近年は、上記の研究蓄積の上に、関中地区の唐墓の墓葬をめぐる諸問題を系統的に論じる程義『関中地区唐代墓葬研究』（北京・文物出版社、二〇一二年）が刊行され、唐代墓葬研究は文字通り画期をむかえることになった⁽²³⁾。同書は、二一世紀初頭までの情報を系統的に整理し、唐代関中平野の墓葬の変遷を初めて系統的に分析した成果である。いうまでもなく、関中の唐墓は都城の長安と密接な関係を持ち、唐朝全域の墓葬の一つの基準にもなるので、本書が関中のみならず唐代墓葬研究全体に与える影響は大きい。程義『関中地区唐代墓葬研究』によって、今後の唐墓研究の基礎が確立したといっても過言ではないだろう。

程義氏は、同上書において、唐墓の付設設備（陵園の牆と闕、陵墓の封土堆、陵墓前の石刻等）や、唐墓の地下構造、葬具と封門、随葬品（鎮墓神怪、塔式灌、人物類陶俑、動物類陶俑、随葬品の空間分布・構成・分期、随葬品の数量等）、墓壁画、墓の立地と配列（皇帝陵墓葬の配列、家族墓地の配列、長安城周圍墓葬区の分布、特殊な人間集団の墓葬区の存在等）、唐墓をめぐる諸問題（唐墓誌における道教要素、唐墓誌における仏教要素、双室墓研究の補充、乾陵地下構造の推測、唐代墓葬の等級等）を、順次、系統的に分析し、関中地区の唐墓の特色を明確にした。

今後の関中平野の唐墓の研究が、程義氏の研究を基礎に進展することになることが疑いないが、程義氏の研究は、考古学にもとづく遺物の系統的整理に重点がおかれているため、豊富に残された文献史料を活用することで、埋葬研究をさらに多角的に進化させる課題が、後学に残されている。本稿は、このような課題に、長安史研究の立場から答えていく試みである。

（4）ソグド人墓

ソグド人とは、中央アジアのアム河とシル河の流域（ソグディアナ）のオアシス都市に居住したイラン系の人間集団

である。ソグド人は、特に四〜八世紀に、ユーラシア大陸のオアシス都市を結ぶ商業網を基盤に、世界史上初めてのユーラシア大陸規模の「商業帝国」をつくり、ユーラシア大陸の各地域において、商人のみならず政治家・軍人・宗教家・芸術家・芸人等としても多方面で活躍した。まさしく、六〜八世紀は、ソグド人の時代²⁴だった。

近年では、森安孝夫、吉田豊、石見清裕、荒川正晴、榮新江、Etienne de la Vaissière、森部豊、山下将司、畢波、齊藤茂雄、大澤孝、福島恵氏等の研究により、ユーラシア大陸の広域にわたって活躍したソグド人の動向が細部にわたって明らかになってきており、唐長安におけるソグド人の活動の一端もうかがえるようになってきた(図5のソグド人居住地も参照)。

長安の西域人の多くはソグディアナから中国に來たソグド人であり、唐代の史料でいう「胡商」とは、多くの場合ソグド商人のことだった。上記のように、これらソグド人は、商業活動の他に、武力に長けた軍人や政治家・宗教家・芸術家・芸人等、多様な職業で重要な役割をはたしていることが判明している²⁴。隋唐長安城の近郊に存在していたはずの多数のソグド人墓はまだ未発掘であるが、北周長安時代のソグド人墓は複数発掘されている²⁵。近年、石見清裕編著『ソグド人墓誌研究』(東京・汲古書院、二〇一六年)が刊行されて、ソグド人墓誌の詳細な訳注が集成され、研究が一段と進展した。

漢代長安城の空間を継承する北周長安城は、隋大興城建築の際に禁苑の中に包み込まれた。北周と隋・唐は、都城の場所も為政者の血筋も基本的に継続している²⁶ので、六世紀末から七世紀初の北周末・隋唐初は、一連の類似した政治・文化的傾向をもつ時期だった。北周長安東郊で発掘されたソグド人の安伽(五一八一〜五七九)墓や史君(四九四〜五七九)墓、康業(五一一一〜五七二)墓等の遺品から、北周末の長安城のみならず、隋唐初の長安城のソグド人の生活の一端を復原することが、推定可能となってきた(安伽と史君は北周長安城の東郊(隋唐大興城の禁苑)に埋葬されたが活動拠点は長安から離れているのに対して、康業は長安を拠点に活動した)。

安伽墓の墓主・安伽は、北周の同州(関中平野東部の都市、図1参照)のソグド人聚落の指導者である薩保になった人物である。墓誌の姓から、父はソグディアナの安国(フハラ)出身のソグド人、母は漢人と考えられている。

二〇〇〇年五月から七月にかけての安伽墓の発掘は、その出土遺物の豊富さから中国内外の研究者を驚かせ、現在も、さまざまな角度からの分析が続けられている。安伽墓の全貌は、陝西省考古研究所編『西安北周安伽墓』（北京・文物出版社、二〇〇三年、一二三頁＋図版一二八頁）からうかがうことができる。

史君墓の墓主・史君（四九四―五七九）は、長安に移居した後、涼州の薩保を授けられている。史君は、史国（キツシユ）の出身で、妻の康氏も、同じソグディアナの出身のソグド人で、サマルカンド（康国）出身と思われる。二〇〇三年六月から一〇月にかけて発掘された²⁶。史君墓で注目すべきは、ソグド人墓で初めて、ソグド文と漢文の墓誌が存在したことである。現在、ソグド文墓誌は吉田豊氏、漢文は石見清裕氏等によって解説されており、六世紀末の長安近郊に埋葬されたソグド人の事績が解明されている²⁷。

さて、安伽墓と史君墓の墓室には、石製の榻や櫛が置かれており、墓主の生前の生活が浮き彫りされていた。浮き彫りの精巧さには驚かされる。付図の安伽墓の墓室に置かれた石榻の浮き彫りを、陝西省考古研究所編『西安北周安伽墓』の解釈にしたがって紹介すると、「奏樂舞踏図」、「樂舞宴飲狩獵図」、「居家宴飲図」、「賓主相会博奕図」、「野宴商旅図」、「奏樂宴飲舞踏図」となる。北周の長安城（ないしその郊外）に暮らした墓主のソグド人たちが、遊牧民（突厥か）の居所を訪れて商談をしている様子も、描かれている。ソグド人たちが、隊商を組んで遊牧部族と関中平野の間を往来していた様が、初めて具体的に明らかになった。史君墓にも類似した浮き彫りがあり、安伽墓との比較分析が進められている²⁸。

(5) 一般住民の墓

長安城内には、東市と西市、豊邑坊（A8）などに、葬儀屋が存在して繁栄していたことが判明しており、城内住民の墓葬の需要は、葬儀業を一大産業にさせた²⁹。長安城周辺には、官職につかなかった一般住民の墓が無数に存在していた。近年の発掘によって、長安城の西郊が、唐代を通して庶民の墓や下級官人墓が集中的に立地した場所

あることが判明している⁽³⁰⁾。注目すべきは、葬地として必ずしも理想的な場所とはいえない長安城西南郊の高陽原や細柳原などの地域が、庶民墓が多く存在するとともに、唐初は太宗の兄の隠太子李建成本（五八九―六二六）、太宗第四子李祐（？―六四三）、太宗第二子李恪（六一九―六五三）など罪を受けた皇族たちの墓域となっていることである⁽³¹⁾。庶人の墓は、墓誌をもたない小規模な墓が大半であるが、庶民墓は長安の庶民の生活を知るための絶好の資料である。今後、多角的な分析が進むことになるだろう。

(6) 墓葬壁画

唐壁画墓研究については、韓偉⁽³²⁾、張建林⁽³³⁾、鄭岩⁽³⁴⁾、李傑⁽³⁵⁾、宮万琳⁽³⁶⁾、百橋明德⁽³⁷⁾氏等による優れた研究がある。二一世紀に入り、従来の唐墓壁画研究を集成する李星明『唐代墓室壁画研究』（西安・陝西人民美術、二〇〇五年）が刊行され、長安近辺の壁画をもつ唐墓が系統的に分析された。現時点で、唐壁画墓に関する最も体系的で優れた专著といえよう。また、陝西歴史博物館で唐墓の総合研究をめざす国際会議が開催され、陝西歴史博物館編『唐墓壁画国際學術研討會論文集』（西安・三秦出版社、二〇〇六年）が刊行されたことも、唐壁画墓研究に一つの画期をもたらした。唐墓石槨の線刻画の分析も、李傑『勒石与勾描―唐代石槨人物線刻的繪画風格学研究―』（北京・人民美術出版社、二〇二二年）の刊行によって、新たな段階に入っている。

唐壁画墓の発見は相次いでおり、二〇一四年にも、玄宗時の宰相である韓休（六七二―七三九）とその夫人柳氏の合葬墓の壁画が、西安市長安区大兆街弁郭庄村で発見された⁽³⁸⁾。同年一〇月一八日には、張建林氏の主持による「唐韓休墓出土壁画學術研討會」が開催された⁽³⁹⁾。二〇一六年七月には、「風華再現―陝西歴史博物館新入藏壁画暨保護修復成果展」が陝西歴史博物館で開幕し、唐武惠妃墓壁画や前述の韓休墓壁画、西安南郊航天城唐墓壁画など一六幅の陝西歴史博物館に新収の唐墓壁画の精品が展示された。このように、次第に、唐代壁画墓の全容が明らかになってきている。今後のさらなる研究の進展が期待される。

表2 唐関中平野の壁画墓と墓主の両京居住地

番号	墓主の姓名(生卒年)と身分	墓誌紀年	両京における居住地	墓の場所	発掘年	出典
1	李寿(李神通、高祖李淵從弟)(577-630) 宗正卿、右翊衛大將軍、河北道行台、左僕射、左武衛大將軍、玄戈軍將、司空公、淮安靖王	貞觀4年(630) 12月	延福坊(C9)	雍州三原縣之万寿原(陵前鄉焦村)		彙編貞觀024・新中國19・唐目錄086・『文物』1974-9・『中國美術全集繪畫編12墓室壁畫』・李星明『唐墓壁畫考識』(『叢雲』1994-3)・宿白『西安地區唐墓壁畫的布局和内容』(『考古學報』1982-2)137-154頁・町田章『古代東アジアの裝飾墓』
2	楊溫(568-639) 洛陽都督、觀國公、贈開府儀同三司、譚州刺史	貞觀14年(640)	長安長壽坊(B8)十字街北之西	昭陵陪葬	1979	陳志謙『昭陵唐墓壁畫』(『陝西歷史博物館館刊』第1輯、西安・三秦出版社、1994年)114-119頁
3	李思摩(583-647) 本姓阿史那氏、右武衛大將軍、贈兵部尚書	貞觀21年(647) 3月16日	居德坊(A4)	昭陵陪葬		彙編統貞觀050・唐目錄292・昭陵碑石112-113頁・李星明『唐代墓室壁畫研究』
4	竇誕(580-648) 高祖小女襄陽公主駙馬、光祿大夫、工部尚書、荊州刺史	貞觀22年(648)	長安輔興坊(C2)西南隅	咸陽底張鄉韓家村	1985	張正明主編『中國文物地圖集・陝西分冊(下)』(西安・西安地圖出版社、1998年)364頁
5	司馬叡(584-649) 太子故左內率	貞觀23年(649) 2月1日	安興里之第(13)	万年縣銅人鄉・西安市灊橋區洪慶鄉路家灣		彙編統貞觀063・唐目錄335・『考古与文物』1985-1
6	段簡璧(617-651) 郅國夫人、長孫氏妻、太宗外甥女、高宗從姊	永徽2年(651) 1月4日	頡政里第(C3)	昭陵陪葬		彙編統永徽008・唐目錄407・昭陵碑石121-122頁・『文博』1989-6
7	韋尼子(607-656) 昭容	顯慶元年(656) 9月8日	崇聖宮(崇德坊D8)	昭陵陪葬		彙編統顯慶005・唐目錄606・昭陵碑石129頁・『文物』1987-1
8	程知節(589-665) 驃騎大將軍益州大都督上柱國盧國公	麟德2年(665) 2月7日	懷德里第(A6)	昭陵陪葬		彙編統麟德019・唐目錄1047・昭陵碑石157-159頁・選粹・『中國文物地圖集(下)』
9	李勣(594-669) 英國公、太子太師	咸亨元年(670)	長安普寧坊(A2)西南隅。 洛陽扱善坊(H8)・通利坊(J7)	昭陵陪葬	1971	昭陵博物館『唐昭陵李勣(徐懋公)墓清理簡報』(『考古与文物』2000-3)3-14頁
10	阿史那忠(611-675) 右驍衛大將軍、薛國公	上元2年(675)	洛陽尚善坊(E8)	昭陵陪葬	1972	陝西省文物管理委員會、禮泉縣昭陵文管所『唐阿史那忠墓發掘簡報』(『考古』1977-2)132-138、80頁
11	薛元超(623-684) 和靜縣主駙馬、太子舍人、中書令、贈光祿大夫、秦州都督	垂拱元年(685)	長安崇仁坊(H4)東門之北 洛陽豐財坊(K1)	乾陵陪葬	1971	張正明主編『中國文物地圖集・陝西分冊(下)』(西安地圖出版社、1998年)470頁・楊正興『唐薛元超墓的三幅壁畫介紹』(『考古与文物』1983-6)104-105頁

番号	墓主の姓名(生卒年)と身分	墓誌紀年	両京における居住地	墓の場所	発掘年	出典
12	李晦(628-689) 右金吾衛大將軍、秋官尚書	永昌元年 (689)	洛陽溫柔坊 (H9)	高陵馬家湾 鄉馬家湾村	1995 -1996	陝西省考古研究所『陝西新出土唐墓壁畫』(重慶・重慶出版社、1998年)63-67頁
13	温思曛(624-685) 周太中大夫司農少卿上柱 國、温綽子	証聖元年 (695) 12月21日	平康里第 (H5)	長安之東白 鹿原・陝西 省西安市東 郊紡正街		唐補遺8輯312-313頁・唐日録10326・『文物』2002-12
14	姚無陂(633-696) 平州司倉	万歲通天2 年(697) 8月16日	延壽坊 (C5)	城南奉西之 原・陝西省 西安市南郊 雁塔区曲江 鄉羊頭鎮		補遺8輯7-8頁・唐日録10344・『文物』2002-12
15	李賢(654-684) 章懷太子、高宗・武則天次 子	神龍2年 (706)	長安安定坊 (B1)東南 隅	乾陵陪葬墓	1971 -1972	陝西省博物館・乾陵文教局唐墓 發掘組「唐章懷太子墓發掘簡 報」(『文物』1972-7)13-19頁・ 周天游、張銘治主編「章懷太子 墓壁畫」(北京・文物出版社、 2002年)
16	李重俊(?-707) 節愍太子、中宗第3子	景雲元年 (710)	洛陽宣風坊 (D10)	定陵陪葬 (富平宮里 鄉南陵村)	1985	陝西省考古研究所・富平県文物 管理委員会『唐節愍太子墓發掘 報告』(北京・科学出版社、2004 年)、陝西省考古研究所『陝西 新出土唐墓壁畫』(重慶・重慶 出版社、1998年)101~163頁
17	契苾氏(655-720) 右金吾衛將軍常山県開國公 史氏妻、鎮軍大將軍契苾何 力女	開元8年 (720) 5月22日	居德里私第 (A4)	昭陵陪葬		彙編続開元036・唐日録2767昭 陵碑石214-215頁・『唐墓壁畫珍 品選粹』、『唐墓壁畫集錦』、『中 國文物地圖集・陝西分冊(下)』
18	李擢(?-724年) 惠庄太子、睿宗次子、申王、 司徒兼益州大都督	開元12年 (724)	洛陽崇業坊 (F10)	橋陵陪葬	1995 -1996	陝西省考古研究所『唐惠庄太子 李擢墓發掘簡告』(北京・科学 出版社、2004年)
19	韋愼名(652-727) 銀青光祿大夫、彭州刺史、 上柱國	開元15年 (727) 1月13日	懷真里第 (D9)	高陽原・陝 西省西安市 長安区郭杜 鎮		唐補遺8輯367-368頁・唐日録 10644・『考古与文物』2003-6
20	李邕(687-727) 高祖曾孫、嗣魏王	開元15年 (727)	長安興化坊 (D7)西南 隅空觀寺東 長安崇賢坊 (C8)西南 隅 洛陽嘉善坊 (J10)	獻陵陪葬	2004 -2005	陝西省考古研究院『唐嗣魏王李 邕墓發掘報告』(北京・科学 出版社、2012年)
21	薛萸(?-727) 右驍衛大將軍、雁門県開國 公、左万騎使、史氏夫	開元15年 (727) 12月11日	醴泉里之私 第(B4)	万年県長樂 鄉界龍首原 (合葬于婦 人旧墓之 傍・西安東 郊經一路)		彙編開元274・新中国89・唐日 録3007・『文物參考資料』1956-6・ 町田章『古代東アジアの裝飾墓』

番号	墓主の姓名(生卒年)と身分	墓誌紀年	両京における居住地	墓の場所	発掘年	出典
21	臧愷亮(662-729) 左羽林大將軍、冠軍大將軍 上柱国	開元17年 (729) 8月22日	長安平康坊 (H5) 南門 之東次北	猷陵陪葬	1984	「涇渭積古」創刊号、1993年、張正明主編「中国文物地圖集・陝西分冊(下)」(西安地圖出版社、1998年)449頁・彙編統開元098・唐目錄3657
22	李憲(679-742) 睿宗長子、玄宗長兄、追贈 讓皇帝	天寶元年 (742)	洛陽施善坊 (F8)	蒲城三合郷	2000	陝西省考古研究所「唐李憲墓發掘報告」(北京・科学出版社、2005年)
23	史思礼(668-744) 右龍武軍翊府中郎將、壯威 將軍	天寶3年 (744) 8月22日	興寧里私第 (J2)	京兆府万年 縣瀘川郷白 鹿之原、西 安市紡織城 郭家灘村		彙編統天寶019・新中国111・唐 目錄3514・「中国文物地圖集・ 陝西分冊(下)」
24	蘇思勗(700-744) 内侍、銀青光祿大夫、内侍 省内侍員外	天寶4年 (745) 3月14日	安興里私第 (I3)	万年県長樂 源、西安市 東郊經五路 興慶宮遺跡 付近		彙編統天寶021・唐目錄3543・考 古60-1・「中国美術全集絵画編 12墓室壁画」・「考古学報」82-2・ 李星明「唐墓壁画考識」(『朵雲』 1994-3)・宿白「西安地区唐墓壁 画的布局和内容」(『考古学報』 1982-2)137-154頁・町田章「古代 東アジアの装飾墓」
25	宋氏(功德山) 内侍上柱国雷氏妻	天寶4年 (745) 9月6日	輔興里之私 第(C2)	西安市東郊 韓森寨		新中国113・唐目錄3546・『考古』 1957-5
26	張去奢(?-747年) 玄宗姨母の母、銀青光祿大 夫少府監范陽県伯常芬公主 夫	天寶6年 (747) 3月12日	長安安業坊 (E8) 横街 之北次南	咸陽洪瀆 原、咸陽市 底張鷟4号	1963	彙編天寶110・新中国116・唐目 録3505・孫秉根「西安隋唐墓的 形制」(『中国考古学研究2-夏 鼐先生考古五十年紀念論文集 一』北京・科学出版社、1986年) 161、162頁・賀粹城「唐墓壁画」 (『文物』1959-8)31-33頁・町田 章「古代東アジアの装飾墓」
27	張去逸(698-748) 太僕卿、銀青光祿大夫、上 柱国	天寶7年 (748) 8月21日	頌政里之私 第(C3)	咸陽之北原 義陵郷、咸 陽市底張鷟 3号		彙編天寶125・新中国120・唐目 録3622・『中国考古学会第一 次年會論文集』・「文博」1984-2・ 町田章「古代東アジアの装飾墓」
28	高元珪(684-755) 陳留郡太守、明威將軍檢校 左威衛將軍、宦官高力士兄	天寶14年 (755) 8月甲子	大寧里(I2)	東郊龍首 原、西安市 東郊高樓村 西高一机福 5号墓		彙編統天寶113・新中国138・唐 目錄3868・『文物』1959-8・『中 国考古学会第一次年會論文集』
29	高力士(684-762) 内侍監、開府儀同三司、上 柱国、齊国公、贈揚州大都 督	宝応元年 (762)	長安翊善坊 (H1) 東 長安興寧坊 (J2) 南門 之東	泰陵陪葬	1999	陝西省考古研究所「唐高力士墓 發掘簡報」(『考古与文物』2002 年第6期)21-32頁
30	韓氏 揚州大都督府司馬吳賁妻	永泰元年 (765)	洛陽道光坊 (H2)	西安東郊興 慶村	1967	中国科学考古研究所「西安郊区 隋唐墓」(北京・科学出版社、 1966年)14-15頁